

## 『亀巢稿』について

要 木 純 一

本論文で扱う『亀巢稿』は、元代から明初まで、九十余年の長きに渡って生を享けた、文人にして道学者であった謝応芳の詩文集めた別集である。今、彼の生涯の事跡を詳細に述べる余裕を持たないので、後世、そして恐らくは当時の、彼に対する公式的な評伝として『明史』の列伝を引くことにする。

「謝応芳、字は子蘭、武進（今の常州）の人也。幼き自り志に篤く学を好み、心を性理に潜め、道義名節を以て自らを励ます。元至正（西暦一三四一―一三六七）の初め、白鶴溪の上に隠る。小室を構えて、顔して（額を掲げて）『亀巢』と曰う。因りて以て号と為す。郡辟きて郷校の子弟を教えしむ。質を先にして文を後にし、諸生皆循循として雅飭たり。異端の世を惑わすを疾みて、嘗て聖賢の格言、古今の明鑒を輯めて『辨惑編』を為す。挙げて三衢書院の山長と為さんとする者有るも就かず。天下兵起くるに及んで、地を呉中（今の蘇州）に避く。呉人争いて延き致して弟子の師と為らしむ。

之を久しくして、江南底定し、始めて来帰す。年七十を逾ゆ矣。徙りて芳茂山に居る。一室蕭然たるも、晏如たる也。有司徴して郡志を修めしむ。強いて起ちて之に赴く。年益ます高くして、学行益ます劬む。達官縉紳の郡に過ぎる者、必ず其の廬に訪ぬ。応芳は布衣韋帯にして之と礼を抗しくす。議論は必ず世教に関わり、民の隠えに切し、而して善を導くの志衰えず。詩文は雅麗にして蘊藉、而して自りて得る所の者は、理学を深しと為す。卒年九十七」

これと、末尾に「大明洪武十年（一三七七）歳は丁巳に次る、七月十一日、病中に友人の江陰の張端に口授す」の但し書きのある、自らの為の『墓誌銘』（『亀巢稿』巻十九。二十卷本Ⅱ後述）に「春秋虚しく度る八十二、著書数篇

而已矣」とあるのなどによつて、一二九六年から一三九二年、すなわち十四世紀のほぼ一世紀分を生きた人であることがわかるのである。本論文で何度か言及されるであらう、楊維禎（一二九六一—一三七〇）と同年代である。かくも長い一生であるが、江南の文壇で有力者として活躍したのは、楊維禎と同じく、主に元末、十四世紀の中頃であつた。弱年、復活された科擧にいどんだが（『龜巢稿』卷一「丹陽の諸葛用中、金壇の王元徴と偕に同郷試に應ずるに、風に無錫に阻まる、用中の韻に和す」詩等があり、卷一にはその答案とおぼしい『四靈賦、浙江郷試』が収められてゐる）、恐らく志を得なかつた。楊維禎が、郷試、さらには大都での会試に及第して、結局は挫折するが官界の生活を始めたのとは違い、処士、民間学者として故郷の常州で生きる道を選んだのである。

そして六十歳になつて、彼の号の由来となつた、常州郊外の龜巢と名付けた新居に隱棲しようとする。『龜巢稿』卷十五『龜巢記』にいう。

「至正丙申（十六年）一三五六、予は地を瀟（常州西南にある瀟湖）の上に辟け、旧識の里翁劉氏の家に依り、室一区を築き、婦子を棲ましめ、差や膝を容る可し。既にして龜巢を以て之に題す。客或いは予に過りて曰く、龜亦た何ぞ嘗て巢有らん哉。予曰く、子聞かず乎、千歳の龜、蓮葉に巢つくと。初めより経営の力を費やさざる也。顧みに予の此の室は寔に之に類せり。地を里翁に僦り、地は直を論ぜず、力を隣伍に仮り、力は傭うを受けず。工材を鳩むるは則ち郷邑の諸友人有りて之を相く。故に其の室は勞せずして成る。今也門を閉じて首を縮め、帖然として蔵六の龜の其の間に蟄せるが如し。此れ龜巢の名づくる所以也」

そして、この農村で安らかに生を終えればよしというつもりであつた。

「（龜とは名付けたが）但し嘘吸導引して龜の如く年を永くする能わず。苟そめに此こに于いて生を乱離に偷み、禍いを鋒鏑に免れ、要領を全くし以て其の天年を終うれば、志願足れり」

国家の大事については他にすぐれた人材があるといつて、自分の隱遁の志を述べる。

「夫の休咎を明らかにし吉凶を断じ、大疑を国家に決し、洛に浮びて書を出し、太平文明の瑞と為るが若きは、則ち同類の中に自ら四靈を備え斯の世を相る者有り」

後述するように、朱子学者の謝応芳は晩年までこの世に秩序と正義を回復したいという志を失わなかったのであるが、元末の乱離の中で身を全うするには、政治に距離を置く必要があった。

しかし、その年のうちに事態が急変する。後の明の太祖、朱元璋は軍を率いて集慶（今の南京）を陥落し、さらに配下の徐達に命じて鎮江を攻略させた。一方張士誠が南下して平江（今の蘇州）に入った。いよいよ群雄割拠の時代になり、江南地域は戦乱に巻き込まれる。謝応芳も亀巢を焼かれ、以後流浪の日々を過ごさねばならなくなった。『亀巢記』の直後に載せられている『亀巢後記』に次の如きう。

「是の歳八月の初め、天兵の西州自り来たる者（朱元璋軍に追い立てられた元兵のことか）、四郊に火つけ、其の人を食う。吾の亀巢、先世の旧宅と俱に燼ゆ矣。予乃ち妻子を船にのせ間行して、而して東のかた横山を過ぎ、無錫に竄る。期月の間、屢ば危きに瀕す。是の時に当り、蓬廬に跼伏し、息を屏めること牀を支うるもの若し。然れども猶お数数頸を引きて回顧し、以て其の故土を恋う。明年仲秋、婁江の東に至る。海に近し。潮風汐雨、栖首を漂揺す。之を久しうして遂に之を捨てて人間に従いて屋を借りて寓す。四年を閲て凡そ五たび徙る。隣邑に喙類無きを聞く。是に于いて同室の人、幸いなること再び生まるるが若し。貧窶と雖も以て苦と為さず、且つ復た以て楽と為す也」

九死に一生を得た、厳しい流浪の生活においても謝応芳は楽しみを見出す。続く部分は彼の哲学を如実に伝えるところなので、末尾まで引用する。

「吾の楽しむ所に至りては則ち又窮居無事なるを以て、専心して古えの聖賢の書を読み以て其の志を広くするを得ることなり。天を仰いで愧はず、地に俯きて忤はず、廓如たる也。然れども此の大凶を視るに、吾が生は浮けるが若し、夫の亀の蓮の葉に浮ける者と何ぞ異ならんや。故に至る所亀巢を以て室に名づく。偈仄たりと雖も心に餘裕有り。蓋し棟宇を以て巢と為さず、而して天地を以て巢と為す也。峻宇雕墻、其の光を知る莫く、華門圭竇其の陋を知る莫し。但だ此の巢、開闢自り以来、数千載を歴て壞れざるを知るのみ。吾は万物と共に其の間に居て、正に藩籬町畦以て自ら局せざる也。是を以て而して見れば、区々たる旧巢は、墮せる甌と与に奚ぞ惜しまん。物の巢居する者衆し矣と雖然も、未だ亀の巢の先後異なる罔きに擬うるに若かず。亀は則ち其の靈に擬うる耳。靈を以て自ら焦くも亦た其

の世に用いらると曰うが若く然る也。世吾を用いずんば、吾が生自ら全からん。吁、用いらると用いられざると、全きと全からざるとは、造物者の之を如何に処するかに係る。龜の能く為す所に非ざる也。惟だ両間の巢のみ人壊す能わず。此れ吾が心恃みて安んずる者なり。吾が心既に安んずれば、何くに往くとして樂しまざる。第だ知らざる者の巢無くして而も名有りと謂いて、疑いて誕と為すを恐れて、故に重ねて毛穎氏に託して之を告ぐ」

『明史』の列伝に「心を性理に潜む」(詩文の)自りて得る所の者は理学を深しと為す」とあるように当時の理学の大一人者と目される学者であり、そう思われるにふさわしい性格も持つていたであろうが、その文章から見受けられる気風は、普通の朱子学者に見られる観念的な面が少ないように思われる。『龜巢稿』には「……を論ずる書」というような、形而上学の議論をする文章は殆どないのである。屁理屈は多いが、ともかく現実の事柄や問題に基いておのれの所信を明かにする文章が多い。

この文章も、「龜巢」が焼かれ故土を離れた後も行く先々の寓居に「龜巢」の名をつけ、更には寓居の名に限らず、自己の号、いわばキャッチフレーズとして使うのは何故かという素朴な疑問に答えるのだという形で議論が展開される。そして、作者の頭の中では、形而上学的高度の体系的な演繹が或いはあつたかも知れないが、文章はあくまでも、浅薄なまでに通俗的である。要するに、自分は天地を巢にする龜であるということを端的に主張するのである。それも「理」や「氣」等の形而上学的用語を用いず、「開闢自り以來、数千載を歴て壞れず」のごとく、ある概念(イコール「理」というわけではないが)が現実の歴史世界においてどのような性質をもつものとして立ち現れるかということがわかるような具体的な表現を好むのである。理念のみの世界に閉じこもるのではなく、あくまでも現実性を重んじるのである。

私がここでいう現実性は少しく意味するところが広いかも知れない。ある概念が現実においてどのような作用を持つかを考慮するプラグマティズムの立場でいう現実性に限らず、頭の中の概念操作において形而上学的高踏な議論ではなく、一般人にわかりやすい、俗耳に入りやすい議論をすすめることをも現実性と考えたいのである。具体的にいえば、龜が蓮の葉を巢にしたり、天地を巢にしたりするという表現を、形而上学的議論では比喩としてすまずし、ま

たありありと、具象的、映像的なイメージを頭の中に描いてはかえって議論の流れを阻害する。しかし、かかるイメージを描きつつ議論に納得する人も多数いるのであって、私のいう現実性を持った文章とはこのような非哲学的なタイプの人間にじっくり来るような種類の文章をいう。現代の所謂知識人が、所謂大衆をテレビの映像や漫画によって操作されやすく理論性がないと軽蔑するように、観念的な議論を好まぬ現実的な民族だといわれる漢民族にとつても、特に知識人においては、あまりに生々しい視覚的なイメージによりかかる議論の立て方は見戯に等しい、浅薄な下品なものだと思われていたであろうと私は感じていた。だから先述の謝応芳自らの為の『墓誌銘』にも「干戈十年海に浮かびて避け、強いて亀巢と名づくるは遊戯に等し」という自嘲の言葉が出て来るのである。そこには何かいきがったような号の付け方をはじめの気持ちもあつたらうが、私は「亀」というあまりに生々しいイメージが知識人の号にそぐわないということ（無論言葉の上だけのことで本心は得意であつたらうが）反省した句だと考える。

このようなイメージにたよる議論操作は、強い印象を与え俗耳に入りやすいという利点があるだろうが、その強い印象に引きずられて理屈が通りにくくなるという欠点がある。楊維楨ならば、（特に詩についていわれるが、文も含めて）人をいかにぎよつとさせるかに意を用いるタイプの文学者なので、文の理などに拘らないであろう。だから、「文妖」と批判された。ところが、謝応芳はいやしくも理学を講ずる人であるから、理を通さなくてはならぬ。そのため、文章の前半で人を感じさせるイメージを表現しても、後半でこれを理のうちに收拾するために、屁理屈や細かな議論を立ててわかりにくくなる面がある。『亀巢後記』も、亀と巢のイメージが終わって、次に移る部分「亀は則ち其の靈に儼らうる耳」から分かりにくくなる。これは要するに、次の、世界（政治）に吾が用いられなくてもかまわない、それで生を全うするもよし、という議論につなげるためであろうが、やや無理な運びである。ついでにいえば、ここは勿論世に役立ちたいという気持ち裏に隠れているわけで、それが容易に文脈の乱れからうかがえるもの（或いはうかがえるように作られているのも）謝応芳に限らず元末の文人の文章の一魅力である。

さて、この後の謝応芳の生涯に簡単に触れよう。清の顧嗣立編『元詩選』二集（中華書局排印本）が彼の詩文から事跡を帰納している。

「至正の初、江浙行省三衢清獻書院山長に挙ぐ。兵に阻まれ、呉の葑門に居り、呉淞江の上に転徙し、室を松江の旁に築く。教授の暇、詩酒を以て自ら娛しむ。洪武の初、年は八十を逾えて、横山に帰隱す。自ら亀巢老人と号す。著わす所の詩文は『亀巢稿』と曰う」

この放浪の時に、崑山の素封家で文学愛好者の顧阿瑛の知遇を得、楊維禎や彼の弟子達との交流を深めた。彼等との間に数々の応酬の作がある。

明に入つて、故郷に帰るが、戦乱の後の故郷は、荒廢を極めていた。『亀巢稿』卷四の『故里に帰る』の詩にいう。「憶う昔走りて兵を避け、郷井を棄別して去る。將に朝暮に帰らんと意うに、行き行きて重ねて回顧す。安んぞ知らん今一紀、方に去りし時の道を踏む。四郊は皆蔓草、白日暝なること霧の如し。榛を披きて閭里を訪ね、水を隔てて先墓を拝す。傷しき哉鶻鵠の原、黃蒿狐兔走る。別墅は破墻在り、郵亭は乃ち新たに作る。隣兒二三輩、茅茨昼に戸を扃ず。相見るも相識らず、熟視するに厥の父に肖たり。坐すること久しくして泣きて且つ言い、我の為に親故を話す。仕に九は兵戈に死に、餘は亡せて処を知らず。其の詞吐きて未だ終わらざるに、我が涙已に注ぐが如し。食に對いて餐する能わず、帰る蟻聚まるを相二期す。吾將に吾が兒に語らんとす、書を売りて農具を買えと。帰りに滴の上の田を耕せ、直しく烏が哺を返すが若くすべし。吾其れ正しく丘に首むけん、此の心庶わくは負くこと無かれ」

謝応芳らしい作品だと思ふ。唐詩、特に杜甫の戦乱の悲惨を描写する詩に学び、しかも典故を多用せぬ平明な描写によつて、写実性の強い独自の境地を開いている。戦後の荒廢の有り様の描写が写実的であることはいうまでもない。悲惨な情景以外のところも入魂の描写がある。「相見るも相識らず、熟視するに厥の父に肖たり」という部分も、同様な表現を無思慮に重ねて稚拙なように見えるが、段々にほんやりと昔を思い出して来て最後にやつとはつと思ひあたる、そのような時間の経過の感じを効果的に表現している。そして、唐詩、杜詩のごとく、悲哀、それも運命的な不可避の悲哀感にじつと沈淪して終わつたり、或いは為政者に漠然と救いを求めたりするのではなくて、何とかこの世界に人間の力で働きかけようという、くわだてを述べる。「吾將に吾が兒に語らんとす、書を売りて農具を買え」先述したが、これもまた具象的な明確なイメージである。このように具体的に經濟（貨幣或いは交換）を語るように

なつたのも、謝応芳の現実性重視の態度によるであろうし、また現実をきつちりと把握して見てゆかざるを得ない形に人を育て駆り立てる経済の発展によるものであろう。末二句「吾其れ正しく丘に首むけん、此の心庶わくは負くこと無かれ」——私はまもなく死ぬだろう、わが期待にそむかないでくれ、というのも、いかにも道徳的で文学から外れるように思える反面、未来への尽きることのない期待を感じ取れ、時代が、作者また読者が、杜甫の如く文学的な一種の快感としての超越的な悲哀に浸ってばかりいることを許さず、具体的な建設的な方策を求めているからではないか。その意味で、現実主義者謝応芳の現実的な詩のしめくり方だと思ふのである。

謝応芳はなおこの後二十年余り生き、楊維禎・顧阿瑛ら同年代の作家をはじめ下の世代までもが、多く不遇のうち死んでいった中で、一人気を吐き、大量の作品を明代になってからも残した。『龜巢稿』の巻首に、盧熊の序が収められているが、それにいう、

「熊は交わりを托すること一五、六年。一時の倡和、楊維禎、廉夫、倪瓚、元鎮、顧瑛、仲英の若きは、俯仰の間に、茲の泉壤に淪しずむ。先生は年八十を踰え、横山に帰隠し、寔まことに後進の景慕する所と為り、其の著す所の著述は伝わるを期せずして而して自ら伝わる者有り矣」

元末文人の最後の生き残りであり、明初思想・文学界に指導的な役割を果たしたことが知れる。『龜巢稿』巻二十所載の『重外甥女周氏を祭る文』には、洪武二十四年（一三九一）十一月とあるから、それが本当ならば死の前年まで健筆を揮ったことになる。本論文では明代に入ってから謝応芳のことはあまり述べない。

ここで、謝応芳の別集『龜巢稿』のテキストについて説明する。（『辨惑論』『思賢論』等の他の著作については、後に言及する）

『龜巢稿』のテキストの流伝は少しく複雑であり、私も全テキストに目を通したわけではない。今、劉兆祐著『四庫著録元人別集提要補正』（私立東呉大学・中国學術著作奨助委員会。一九八八。以下『補正』と省略）の説明を参照した。

テキストには大きく分けて三系統ある。

(一) 一七卷本 抄本

今最も見易いのは『四庫全書』（『文淵閣本四庫全書』）所収の『龜巢集』である。『提要』によれば、

「集の一巻は賦たり、二巻より五巻に至るまでは詩たり、六巻より十一巻は雜文たり、十二巻は詩餘たり、一三巻より十五巻に至るまでは又雜文たり、十六巻十七巻は又詩たり。編次頗る緒無しと爲す。疑うらくは後人の伝写して、其の旧第を乱したるか。抑も或いは本もとは前集十二巻、後集五巻、一は則ち詩を先にして文を後にし、一は則ち文を先にして詩を後にし、伝写するに誤りて併せて一集と爲し、故に參錯することは是くの如くなりしか」といふ。編立てが蕪雜な本である。

(二) 二十卷本、抄本

『四部叢刊広編』所収の『龜巢稿』が最も見易い。これは民国二十四年（一九三五）、張元濟が江安傅氏の双鑑樓藏鈔本二十巻を借りて影印したものである。なお、張氏の跋によれば、謝応芳は張氏の母の十八世の從祖であるという。卷首に洪武十二年（一三七九）の余詮の序と盧熊の序を載せ、卷一は賦、卷二から卷十は詩、卷十一は詞、卷十二は書、卷十三は疏、卷十四は序、卷十五は記、卷十六卷十七は啓、卷十八は題、跋、說、雜體、卷十九は行狀、銘、贊、箴、卷二十は祭文である。このうち卷八から卷十に収める詩は、十七卷本にないものである。（『補正』参照）

張氏の跋によれば

「余は鉄琴銅劍樓に於いて一抄本を見たり。分巻は四庫本と合す。王蓮涇、宋賓王先後して讐校すること極めて精審。但し自りて出づる所を言わず。兩本の詩文互いに多寡有り。其の独り是の本に見ゆる者は詩二十一首有り。彼に存して此に佚する者は詩五首、文二首。又第二十卷『代わりて吳間眞人を祭る文』、『沈仁齋を祭る文』、『代わりて表嫂を祭る文』、『代わりて趙師呂を祭る文』は、是の本均しなみに錯簡有り、王宋校本に據りて訂正す……曩むかし聞く、厚庵舅祖嘗て季滄韋藏本を以て覆印して世に行わしむるも、板、咸豊庚申の乱に燬やかる。今復たと見る可からず。余、江安の傅沅叔従り此の本を仮り得たり。因りて更に覆印し、以て其の伝を広め、復た王宋校本を以て讐対し、遺する所の



詩文及び校記を輯録して之を卷末に附す。海塩、張元濟」

『四部叢刊広編』本は、張跋にあるように、『龜巢稿補遺』と『龜巢稿校勘記』が附録についている。このうちの張氏の所謂王宋校本であるが、『四庫全書』本と完全に一致するでもなく、もとの本は出処不明というしかない。

(三) 三卷本(『龜巢摘稿』) 刊本

未見。『補正』によれば、

「中央図書館に又影鈔明洪武十二年(一三七九)王著刊本『龜巢摘稿』三卷有り、黄丕烈の旧蔵為り、每半葉十行、行二十字。卷首亦た余詮、盧熊の龜巢稿序を載す。但だ詩を収むる而已、当時摘稿と全集と並び行わるるを知る也。黄丕烈の跋を載せて言う『謝龜巢集世皆鈔本を流伝す。惟だ龜巢摘稿間ま旧刻本有り。近年蕭山人古籍を胥門の某坊に購うに、挿架中に意無くして一旧刻本を得て去る。心殊に怏怏たり。頃ろ香巖書屋に影写洪武本有り、想うに必ず旧刻従り出づる也。之を購いて以て聊か夙願を慰む』

この三つの系統のテキストのうち、どれが一番良いかは決定しにくい。一七卷本は編次が乱れているので、『補正』は不完の本であると疑い、言外に二十卷本を支持しているようであるが、二十卷本は巻の配列こそとものつていられるものの、巻の中の詩文の順序は年代順のように見えて実は前後関係が乱れており、定まった配列の方針がないように見受けられる。何よりも、先に言及した巻首の余詮の叙は、洪武十二年(一三七九)に書かれたものであるのに、集中には謝応芳の死の前年の一三九一年の作品が載っているのはおかしい。どうも刊本『龜巢摘稿』の序を流用して『龜巢稿』の序に仕立てたようである。盧熊の序にも、

「洪武十年冬先生の子林郡府の挙ぐる所を以て京師に至る。先生書を以て熊に諗けて曰く蘭旧作有り。学士王著は之を板刻せんと欲す。乃ち類叙を為して以て其の請いに従う。子は其れ之に序せよ。」

これは、王著刊本『龜巢摘稿』にこそふさわしい。『龜巢稿』卷十三の『龜巢摘稿』を刊す、王尚綱に代わりて作るも三卷本を意識しているようである。

このように、信憑性の少ないテキストであるので、編次そして内容も改変が加えられている可能性が強い。『明史』

芸文志に、謝応芳の別集が二十巻であるというのに、数字を合わせているのかも知れない。誤字錯簡が多く、著録が近代になって現れたことも、後世の手が加えられたことを予想させる。どうも、十七巻本のごとき雑駁とした整理不足の状態で流伝した後（遺稿の時、既にそうであったかも知れない）二十巻本に改変されたと思われる。

この他『北京図書館古籍善本書目』（書目文献出版社、一九八七）に、十五巻のテキストが著録されているが、今回考察が及ばなかったことを附言する。

以上のような難点があるにもかかわらず、『四部叢刊広編』所収『龜巢稿』本すなわち二十巻本を本論文では採用せざるを得なかった。現在のところ、本テキストが主に読まれ、引用されているという利便による。本論文で引用した詩文は、『四庫全書』本、『四部叢刊広編』附録『龜巢稿校勘記』に所謂『宋王稿本』とも字句上に大きな差はない。

本論の後半では、謝応芳に対する、当時から後代に至るまでの、厳格な理学者という評価が一面的なものでしかなく、その多面性に注目すべきことを述べる。そして、理学、朱子学は一般に華夷思想すなわちナショナリズムと切り離せない哲学だと思われているが、異民族の統治下であった江南地域においては単に反モンゴル運動、漢民族主義というような端的な形では現われず、複雑な様相をもっていたことを指摘し、このようになった背景には、当時の江南地域における経済の発達に伴うジャーナリズム（出版業を中心とするが、口コミ、公開性のある手紙等も含めて）の隆盛があったこと、謝応芳が現実的にそれを利用したであろうことを明らかにしたい。

『明史』で見たように、謝応芳が理学者としての名声を高めたのは、彼の文集によってではなく、『辨惑篇』という書物によってであった。『辨惑篇』は今、『四庫全書』子部所収本によって、その内容をほぼうかがうことが出来、私もこのテキストによって議論をすすめようと思う。

『辨惑編』の内容と代表的な評価を知るために、『四庫全書』の『提要』を引く。

「臣等謹みて案ずるに、『辨惑編』四巻、附録一卷、元の謝応芳撰。応芳に『思賢録』有り、已に著録す。是の編は至正中に作らる。呉の俗鬼神を信じ、拘忌多きに因り、乃ち古人の事迹及先儒の議論を引き、一一條析して之を辨ず。

其の目は凡そ一五、一に死生と曰い、二に疫癘と曰い、三に鬼神と曰い、四に祭祀と曰い、五に淫祀と曰い、六に妖怪と曰い、七に巫覡と曰い、八に卜筮と曰い、九に治喪と曰い、十に扱葬と曰い、十一に相法と曰い、十二に禄命と曰い、十三に方位と曰い、十四に時日と曰い、十五に異端と曰う。末一卷に書及び雜著八篇を附録するは、皆力めて俗見を闢き、断然として理に拠りて以て争い、是の編と相い發明する者也。

昔、宋の儲泳は『祛疑説』を作るも、原本久しく佚し、惟だ左圭の『百川学海』中に其の節本を載す。応芳の此の書は論を持つること、浅近に似たりと雖も、而して能く風俗に因りて之に薬す。用いて以て愚迷を開導すれば、其の勸戒に益あること泳の書と相等し。

而して曹安の『譚言長語』に曰く、毘陵の謝子蘭は聖賢問答の詞の異端を闢く者を取りて書を為し、名づけて『辨惑編』と曰う。經書子史、先儒の正を扶け邪を抑うるの言は備く載す。真に以て人心を正す可し、と。蓋し深く之を取る也。

惟だ葉盛の『水東日記』に曰く、毘陵の謝子蘭氏の『辨惑編』一書は、誠に亦た邪を闢き正を植え、世に益有り。其中、經法を援据し、深く世人の淫祀に惑えるを怪しむは、当たれり矣。乃ち其の先人亡じて自り後、即ち事うる所の神影を火く、其の義に非ざるの故を以てなりと言は、此独り其の當を過ぎたるを惜しむ。『春秋』に、泉台を毀つ、と書く。君子以て台の存毀は安危治乱の繋る所に非ずと為す、居る勿しと雖も可也と。何ぞ必ずしも暴かに其の失を揚げ、之を非り之を毀つこと是に至らん耶。子蘭の淫祀を闢くこと、先儒の成説甚だ多し、正に此を必せず。言わずと雖も可也。子蘭を愛しむ者は、須く削りて之を去るべし云云と。

其の言、切に応芳の失に中れり。蓋し講学の家、往々にして、枉を矯めること直に過ぎたり。此れも亦た其の一つ。読む者は、其の主旨の正しきを取れば可なり矣。乾隆十五年五月恭んで校して上す。

道学者嫌いの四庫全書編纂官紀昀の意向を受けてか、その論旨は至當を称揚しつつも、親の死んだ後、親の祈つていた神の絵姿を焼くというような、酷薄なまでの嚴格さに疑義を呈している。

謝応芳がこの編を発表した当時も、反発は強かつたらしく、『龜巢稿』卷二に『王元徳別去して数年、重ねて呂城

の諸葛氏の家に会す。蘭を写して贈らる。且つ詩の送行するを索む。時に予は『辨惑編』成る。或いは忌みて之を謗る者あり。因りて併せて之に及ぶ』と題する詩があつて、王君がすばらしい蘭を模写して下さったことは、

「絶えて勝れり、書を編みて異端を斥け、我を穿屋に老いしめ、牛衣寒きに。十年歲月硯鉄を磨き、群厖の争いて雪に吠ゆるを贏ち得るのみ。君に願う、為に作れ、指南の車、独り周道に行くは当に如何なるべき」と述べて、編書の苦勞に対して非難の声が大きく、我が行く道の心細い様を告白している。

彼の迷信打破の態度は、現代中国でもある程度評価されているらしい。韓儒林主編の『元朝史』（人民出版社一九八六年）下冊では彼のために『謝応芳的無神論思想』という一章をわざわざ設けている。（三三二六頁から三三八頁）そして、唯物主義の立場に立たず、孔孟思想と両宋の理学を崇拜し、時代と理論の制約を受けていることを批判しながらも、

「謝応芳の世俗と宗教の迷信に反対する態度はきつぱりとしている」と評価する。

しかし、以上の如く、彼の迷信打破の苛烈な側面のみを強調するのは、彼という人間を把握するうえでものたらないように思う。

なるほど、『辨惑編』の本文は、例えば冒頭の『死生』の条、

「死生亦た大なり矣。初めを原ね終わりを要めて以て其の説を知る者に非ざれば、往々にして生を貪り死を畏れ、而して異端邪説の惑わす所と為る。苟しくも之を知れば、則ち生は順い死は安く、以て疑い無かる可し矣。応芳謏聞を揣らず、力めて邪異を排せん。故に先ず聖賢の言う所の死生の理を述べ、以て編首に冠す。蓋し本を端し源を澄ますの意に庶からんか、と云う」

の如く、高所に立つて人に教えを垂れるような説教臭さがあり、この条について「論語曰く、死生命有り」というように聖賢の言葉を羅列する索漠さがあるのだが、『辨惑編』の附録に収められた文章、殆んど『龜巢稿』にも収められているものであるが、それらはまた印象が異なるものである。うち『盛教授に与えて土地夫人を除くを請う書』は、

常州の県学に設けられた土地祠に、なまめかしい夫人の像が置かれたことを批判している。（『龜巢稿』では卷十二）  
「今肖像の設くるや、楚楚たる乎帛銀の飾、盈盈たる乎朱粉の粧。侍従旁らに立ち、男女雜りて処り、儼然として聖人清廟の下に坐するは、能く恥無からん乎」

この後経典からの引用をもとにした批判が続くが、このように少しくどくと現実を具体的に描写した上で、迷信の批判を始めるのが彼の流儀である。

『龜巢稿』の卷十八『癘鬼辨』にいう。

「往る予は無錫に過ぎるに、適ま州人郭を出で神を遶う。赤髮青面にして、吻は両牙を出し、状は詭異を極む。旗旄もて鼓吹し、衛り従いて之を昇ぐ。予嘗て訝りて問う焉。人曰く、此は唐の張巡也。且つ言う、公は死する時、自ら當に癘鬼と為るべしと謂う。故に世は公を称して疫癘の神と為して而して崇め奉る焉。嗟夫、是れ何の邪説する者、附会すること此くの如き耶」

そして、史籍を引いての議論が始まるのであるが、謝応芳はかかる淫祀を抹殺しようとする立場でありながら、かえって怨霊信仰の資料となつてもいいようなルポルタージュ風の具体的な描写をするのである。

このような描写の背景には、元末江南の实事を重んずる風潮があると思われる。他の時代では空理空論をもてあそぶタイプであつただろう謝応芳も、その風潮の中で現実を重んじた表現をせざるを得ないのである。

その態度は、交友関係にもあらわれており、『辨惑編』で仏教、道教、卜者をあれほど否定していながら、彼らと親しいつき合いをしている。

特に僧との方外の交わりを示す、詩や送る序が多数あり、『龜巢稿』卷十三に収める疏の殆んどは、寺院の修復のために寄附を募る文章である。また卷十の『送贈して（僧を送る？）日本に題す』という詩は日本僧に送った詩である。道教は『辨惑編』卷四通論に「道家は却つて只だ仏家の瓦礫を取得するのみ。殊に笑う可き也」とあるように、仏教より一段下に見たのか、つきあいはすくないようであるが、卷十三『道家受生会疏』の如きものがいくつつかある。面白いのは卷十四『卜者陸仲明に贈る詩の序』で、次のように言っている。

「卜筮の説、予嘗て『辨惑編』を著して之を論ずること詳まびらかなり矣」

『辨惑編』の流伝に対する自信の程が知れるが、冒頭で世の卜者への不審の條がある自作の『辨惑編』をあげながら、陸仲明は真の卜者であるからこの文を書くのだといって収拾し、卜者であつて人に道を説けば「世教に于いて殊に補う有らん焉」と期待する。

謝応芳の言行不一致とも見えるような以上の如き態度は、経済が発達して江南の庶民達が自らの職業に生き生きとして精を出している、その活気、エネルギーを理論家としても無視できなかったからであろう。

楊維禎の『櫛工王輔に送る序』にいう。(四部叢刊本『東維子文集』卷九)王輔は、人から「櫛耕」という揮毫を送られた、働きのもの櫛づくりである。

「世に耕やさざるを以て耕やす者多し矣。漁は釣を以て耕す。賈は籌を以て耕す。……トは蕃祭を以て耕す。……浮屠氏は梵唄を以て耕す。老子氏は歩虚を以て耕す。神仙方士は丹田を以て耕す。高きこと公卿大吏に至りては礼楽文法を以て耕す。耕すこと一ならずと雖も、不耕の耕たることは則ち一也」

無論、非儒者に対する差別観は厳然としてあるが、どのような卑しいものも、そのエネルギーは世のため人のためになるというような世界観を江南の士大夫は持つていたであろう。謝応芳も現実を直視するならば、士大夫の世界を越えてあらゆる人に働きかける必要を感じていたにちがいない。

さて『辨惑編』に一貫して見えるのは、邪説異端を廢して、正統なるものを護持しようとする朱子学的態度である。だが、モンゴル統治下の元朝にあつては、正統なるものの概念は屈折せざるを得なかつた。正統観の最たるものである、華夷を区別するナシヨナリズムは、南宋の時のごとくあらわにはならず、元明革命において、すぐに明に忠義心が向かうというようなものではなかつた。楊維禎の身の処し方が代表的であろう。鄧紹基主編の『元代文学史』(人民文学出版社 一九九一)の記述を借りてそれを見よう。

「至正の初め、元政府は、遼、金、宋の三史を作ることを決めた。楊維禎は『正統辨』を書いて、元が宋を継ぐのが

正統で、遼、金は正統には列せられぬと論じ、史を修める時は大宋の編年をとって、遼金の記載をそれに従わせるよう提議した。元朝を奉ると同時に、裏では南宋の正統を擁護する気持ちがあった。張士誠が平江を占領した後、召聘したが、彼は赴いたもののとどまらなかった。……明洪武二年朱元璋が彼を召して礼楽書を編纂させたがこの時も赴いたがとどまらなかった」(四九五頁)

「楊維禎が、張士誠が三呉を占領した時官職を受けなかったことは、封建正統観念を持つ明清の文人に称賛されたが、実は彼の張士誠政権に対して持った態度は一貫していない。彼は『五論』を書いて張士誠に献策したことがあり、彼の最愛の門下生張憲は張士誠政権のまねきに応じて出仕し、彼は詩を贈って見送った。ところが張士誠が失敗すると、彼は『銅將軍』『周鉄星』『蔡叶行』等の詩を書いて、偽呉兄弟、妖蔓禍根等のことばで痛罵を加えた。切齒の音が聞こえるようだ」(五一―頁)

「楊維禎は朱元璋の招きに応じて南京につくと、『老客婦語』を作った。詩の意とするところは、自分は元の臣であったから、新しい朝廷には出仕しないということである。しかし一方『大明鏡歌鼓吹曲』を作って、明朝を誉め、元朝をそしっている」(五一―頁)

現代中国人に、このようなくさくさを感じさせる彼の生き方は、一つには保身のためであろう。だが私は心のナシヨナリズムがあまり明確でないことによるのだと考えている。

謝応芳の場合どうか。宋元革命の際、常州は包圍攻撃され、謝氏一族も全滅に近い打撃を受けた。自作の『墓誌銘』にいう。

「宋の革命に遭いて家乃ち燬かれ、煙と滅し埃と飛ぶ三百指(？)、旧家奕世尽く蕉萃す」

『龜巢稿』卷十九には、この際に死んだ伯母鄧氏の行状を記す。

「至元乙亥(一二七五) 天兵南下し、常州未だ平がざるを以て、師を京口に駐む。……是の年五月八日、騎者二十餘輩、里門を攻むること甚だ急にして、衆禦ぐ能わず。遂に奔潰す。騎者其の廬に火つけ、従母及び隣婦数人を虜にし、係累に遭わしめて去る。行きて漕渠に臨みて母乃ち潜かに其の馬を脱し、簪珥を道旁に投じ、水に投じて斃る。……」

嗚呼、吾が従母屈せずして死する者、今に七十年なり矣。応芳児の時、先君子嘗て之を語る。今諸父六人俱に嗣無し。不肖苟くも其の事を白さずんば、是其の潜徳を泯ほろすなり。謹んで先子の遺言を録して、其の行を状すること右の如し。惟れ当世立言の君子、之に紀述を賜えば、則ち従母死すとも且お不朽ならん。謹んで状す」

自分が書かなければ、子供のころから聞いて育った、一族知人の悲劇と節義の伝承がほろんでしまう。このような氣持が彼を一種のナシヨナリズムに駆り立てる。だが、それが直ちに反元活動などには結びつかず、屈折してあらわれるのが、彼および彼を支持した人々のナシヨナリズムの特徴であった。

彼がまず情熱を燃やしたのは、常州の先賢達の表彰であった。『龜巢稿』卷十二『武進県の樊大尹に上つて先賢祠を置くを請う書』は、武進県の県学に県の先賢達を祭ることを進言したものである。もしも、先賢を祭れば、

「士、斯の邑に生まれ、苟くも能く前人の賢の如く世の師表と為れば、亦た無窮の祀を享うくるを得ん矣。是に由りて、感発し興起り、奮勵激昂し、風声氣習、渾然として俱に化せば、又安んぞ胡・張・鄒・霍（県の先賢達）の賢相繼いで出でざるを知らん耶。愚の所謂、事至つて微なりと雖も、風化に係る者は此也。惟だ明府老生の言を以て迂と為さず、国家の風化を以て重と為し、此の盛事を挙げて以て風俗を励まさば、斯文幸いなること甚し、郷邑幸いなること甚し」

この願いは聞き届けられ、謝応芳手ずから『武進県学先賢祀を立つる祭文』を書いてゐる。（『龜巢稿』卷二十）そして特に心を砕いたのは、宋の諫臣鄒浩の事跡の顕揚とその荒れ果てた墓の復興であった。これも、願いがかなつたらしく、『龜巢稿』卷二に「鄒忠公の墓田を復するを喜び絶句十首を賦し兩郡の侯に謝す」と題する詩が残っている。またその事跡が忘れられぬために、鄒浩の言行録を作つて『思賢録』と名づけた。原本は未だ見ていないが、鄭元祐（一二九二—一三六四）『僑吳集』（台湾国立中央図書館、元代珍本文集彙刊、一九七〇影印本）卷八に鄭の序が載つていてその大概を知ることができる。鄭はまず鄒浩の事跡を賞賛した後、その墓が荒れはてていたことを言う。ここに郡士謝子蘭が立ち上がる。

「郡士謝子蘭深く惟おもう。毘陵（常州）は、公の父母の邦也。流風餘韻の以て郷邑に漸被する所の者は、宋の亡ぶに当



たり毘陵独り城守して下らず、其の民殲ぶと雖焉。(?)要するに皆公の忠義然ら使むる也。時は既に平げり矣。典礼修められ且つ明かなり矣。而して忠臣烈士、蒸嘗統つがず、邱壘完まうたからず、祭田復せず。何を以て敦く臣の節を勧めんや。是に於いて再三官に懇こがう。一に子蘭の請う所の如くす。子蘭又公の存歿始終を哀録して、片言隻字も載せざる所無し。凡そ若干卷。之を『思賢録』と謂う」

これを読むと、謝応芳が鄒浩に肩入れしたのは単純に郷土の先賢に対する敬慕だとは言えなくなる。ことは、彼の遺風を受けて、宋元革命の時全滅した常州の冤魂に関わるのである。そして、先の『先賢祠を置くを請う書』にあるように、この常州に生まれる士たちが彼を模範として道に励むことが期待される。見方によっては、元朝打倒の志が隠されているといえよう。当時そう思ったものも多かつたらう。しかし、私は、そこまでは今考えない。私が注目したいのは、謝応芳のこの一種のナシヨナリズムが、すぐに国家論へと飛躍するのではなく、まず常州という一地方への愛着から開始する点である。地に足のついたナシヨナリズムで、現実主義者謝応芳らしい運動といえよう。先賢祠や墓にこだわるのは一見瑣事であって、後代なら世間知らずの觀念主義者の所為の典型と見なされるであろう。しかし、当時は常州の教化、自信回復に役立つ現実的な作用があつたであろうし、そもそも先賢祠や墓や事蹟録の如き、見てわかるもの、イメージし易いものをもとにして議論をすすめる表現方法が、本論文で『龜巢後記』に関して述べたように、実に現実的なのである。

この『思賢録』の編集が、学者謝応芳の江南士大夫界における、実質的なデビュー作となつたらしい。後年明に入つてからの詩の題に、

「『思賢録』は、元末宋の先賢鄒忠公の祠墓の爲にして作る也。洪武壬戌(一三八二)、崑山の王仲昭に会う。語之に及び、慨然として鏤板の意有り。後果たして其の言の如くす。蘭の初意は凡そ郡守及び府教の任に到るに遇えば各の一部を送り、觀感する所有りて其の祭掃の礼を失せざらんことを庶こがうのみ。今蘭、死に垂んなんとするの秋、疇昔を追念して乃ち口占して以て其の情を抒ぶ」(『龜巢稿』卷七)とあるのによつて、明代刊刻されるまでは抄本の形で流通していたらしいことが分かる。本意に反して、有名になつたことに驚いているような口ぶりであるが、実はこの書

を広めるために彼は相当に画策しているのである。

彼が江南ジャーナリズムの勃興という現実とにかくに現実的に対応していったか、そして、江南のナショナリズムの発展が実はこのジャーナリズムの発展と表裏一体であったのではないかという仮説を以下に述べたい。

『四庫全書総目』巻五九、史部、伝記類存目二には、天一閣蔵本の『思賢録』について、「楊維禎、鄭元祐の二序有り」と記している。鄭序は先に引用した。この二人は当時の江南の名士である。謝応芳が彼等の序を求めたのは、『思賢録』が郡守達に見せることだけを目的としたものではなかったであろうことを示している。江南の士大夫界にある程度流通させたかったのであろう。またそうしなければ、為政者に対する圧力にもなるまい。

『亀巢稿』を見ると、巻十六に『贄<sup>ヒキ</sup>もて楊廉夫提拳に見え、思賢録』を序するを求むるの啓』がある。楊維禎の如き風狂的な行動で世に聞こえた奇人と、厳格な田舎儒者の面目のある謝応芳とはそりが合うとは思われないのだが、二人は以後交遊を深めていく。それは、楊維禎が学者として一流であったということもあるが、謝応芳がジャーナリズム、すなわち士大夫界での口コミの人気を意識して、自らを時代風潮に合わせていった面もあったのではないか。この文章も、せいぜい楊維禎の文体に合わせて、ふざけた軽みのようなものがある。

「聞く所を聞き、見る所を見れば、真に神仙十二樓の間に到るが如し。歩けば亦た歩き、趨れば亦た趨れば、或いは弟子三千人の列に在らん」。

ジャーナリズムの世界では、小むずかしい理窟よりも、見た目を引く派手なパフォーマンスの方が説得的である。あたかも、戯曲中の人物のようにそれらしく演ずることが必要である。先に、謝応芳の『亀巢』の号についてこだわりの目立つ行為は、すぐに士大夫界のうわざになった。謝応芳が『亀巢後記』を書くや、楊維禎の門下の郭翼がすぐに『亀巢老人辞』（『四庫全書』所収本の『珊瑚木難』巻六）を書いて応酬した。かくの如く、ジャーナリズムの世界は打てば響くような、反応の速い世界なのであり、一つ一つのパフォーマンスが大切なのである。

常州を離れて流浪の旅に出た謝応芳は、常州から更に江南全体に目を向けて、己の信条を語るようになった。蘇州を訪れた時は、三高祠なる祠堂で、范蠡、張翰、陸龜蒙の三人を祭っているのに対して、范蠡は越のために呉を滅したのだから范蠡をまつるのを止めて呉の季札をまつれと、恐らく張士誠政権の高官に進言した。これが『辨惑編』の附録にも入っている『呉人当に范蠡を祀るべからざるを論ず』（『亀巢稿』巻十二）である。

江南の各地が、敵味方をはつきりとして、異端をしりぞける正統観を身につけることが、風俗を正すことになる、という思惑から出た進言であろうが、戦乱の世には不要不急のことで、謝応芳の思想の硬直性のあかしにする人もいるだろう。しかし、これまた、ジャーナリズムの世界でいわば大向こうを狙った作戦だと考えられないか。この進言の内容が当然世間に広まるのを見越しての上である。つまり、抽象的な戰略論や富国論よりも、祠で祭る像の変更という、イメージを描きやすく、人々が議論し易い材料を用いた方が、自分の思想を広めるのに有利だと考えたのである。したがって、

「亦た敢えて富国強兵の策、驚世駭俗の論有りて以て其の能を銜うに非ず。特に古人の一事風化に関する有るを以て、敢えて閣下の為に之を陳す」

「第だ恐らくは知らざる者、僕の言を以て既に以て身を謀るに足らず、又世に用いらるるに急ならずとして、其の迂闊を斥けて之を譏笑せん。僕は心に于いて誠に愧ずる無し焉」

等という部分も、謝応芳の頑迷を見るのではなしに、迂遠、不要不急を装いながら、人々の心をつかもうとするしたたかさを読み取るべきだと思ふ。

一地方の一淫祠にこだわる、些末主義だと見做すのは当たらないのであって、彼はジャーナリズムを通じて江南全体に自己の思想を語っているのである。ただ、その江南を超えて、天下国家を論ずるといふような、我々が普通いふところのナショナルリズムは少ないように思ふ。それは限界といふよりも、空理空論をもてあそばぬ現実主義から来ている。なぜならあくまでも、発達したジャーナリズムが結びつけている範囲こそが彼が生きる世界そのものだからなのである。謝応芳が「巢」としたのは、「天地」ではなくて、「国家」でもなくて、「江南地域」だったのである。

ジャーナリズムの發展を支えるのは出版事業であろう。謝応芳も、うわべはともかく、自著の出版に人一倍熱心であつた。『亀巢稿』卷十三の疏には、『辨惑編鐫板疏』『募りて思賢録を刊するを勸むる疏、張希印に代わりて作る』『龜巢摘稿を刊す 王尚綱に代わりて作る』等が収められていて、皆出版資金を集める広告文である。様々な事情があるが、出版の世話人の文章を代筆しているのは、彼の出版に対する熱情をあらわすであろう。

彼のジャーナリズムに対する関心は、字を板に刻する刊字工にまで及ぶ。ジャーナリズムのすみずみまで、心を配っているのである。『亀巢稿』卷十四『刊字張生に送る序』では、ジャーナリズム、出版事業の發達がもたらした害悪にふれながらも、それが儒教の大衆化に役立っている現実を承認している。

『古者、毫楮未だ興らず、書は刀筆を以てす。故に六経は口伝耳受なり。誤り無きこと能わず。然れども識者止す焉。其の失猶未だ遠からざる也。毫楮既に作り、師道乃ち備わる。転じて相伝写して譎謬まがまがす多し。近代に至り、板刻の誤りにして、人敢えて遠かに易えざる者有り。況んや俗徒利を規り、其の詞を節去して、章断じ句裂せ使め、以て學者を誤るもの有るに至れり。然れども板本既に行われ、聖經賢伝は、乃ち家ごとに伝えて人ごとに誦するの固きを得たり。亦た名教に功有り矣』

元末江南におけるジャーナリズムの發達は、あらゆる人々を巻き込み、江南各地域を強力なネットワークで結び、一つの運命共同体が成立した。そこに江南ナショナルリズムも發達した。本論文では、謝応芳が、理学者としてはめずらしく、このジャーナリズムに柔軟に対応しながら著作活動をしたことを説明した。

本論文における「ジャーナリズム」の語の意味はかなり曖昧で、明確な定義をしなかったが、私としては、芥川龍之介が次の文章で使っているような雰囲気で「ジャーナリズム」を考えている。(『西方の人』19 ジャアナリスト)

「我々は唯我々自身に近いものの外は見ることが出来ない。少なくとも我々に迫つて来るものは我我自身に近いものだけである。クリストはあらゆるジャアナリストのようにこの事実を直覺していた。花嫁、葡萄畑、驢馬、工人——彼の教えは目のあたりにあるものを一度も利用せずにはなしたことはない。「善いサマリア人」や「放蕩息子の帰宅」

はこう云う彼の詩の傑作である。抽象的な言葉ばかり使っている後代のクリスト教的ジャーナリスト——牧師たちは一度もこのクリストのジャーナリズムの効果を考へなかつたのである。彼は彼等に比べれば勿論、後代のクリストたちに比べても、決して遜色のあるジャーナリストではない。彼のジャーナリズムはその為に西方の古典と肩を並べている。彼は実に古い炎に新しい薪を加えるジャーナリストであつた」

従来元代の詩文は、唐代復帰をめざし、哲学は次第に朱子学が中心になつたとされ、元末文人の復古精神が主に強調されたが、私はジャーナリズムの発達という視点によって、元代詩文の画期的であつた点を探求することを今後の課題としたい。